

近世ヨーロッパの皮革 4. 革製品

元北海道大学農学研究科 竹之内 一 昭

1. はじめに

近世の時代にはコルドバ革の職人が宗教的な抑圧により、スペインからモロッコやヨーロッパ各地に移動し、そこでの皮革産業の発展に寄与した。モロッコ革やロシア革、スウェーデン革、デンマーク革のような地名の付いた革、あるいは革の性状を表したグレイス革やシェア、シャグリーン等が有名である。鞣製技術や革製品製造技術は

17世紀後半以降著しく進歩した。革は古くから武具に使用されていたが、次第に日常用品に使用されるようになった。

2. 靴

1783年発行のフランスの百科事典「科学と技術の絵画集」に当時の靴職人の仕事場が描かれている（図1の上段）^{1, 2)}。後ろの壁に種々の靴型が掛けられており、それ



図1 18世紀フランスの靴職人と製靴道具

を職人が選んでいる。手前では顧客の足の寸法を測り、中央では長靴（深靴）の形づくりや底革の縫い付けをしている。左端の戸外の職人は靴直しである。下段の図は道具類や靴型が示されている。中央部には靴屋の象徴的な道具である半月形小刀がある。左側中辺のスリッパのようなものはオーバーシューズであり、靴の上に履き、泥や汚れを防いだ。当時のパリは道路が汚れており、靴磨きが多くいたそうである。

中世において、爪先が細く尖った靴が流行したが、15世紀末には、爪先が広くなり、丸みのあるアヒルやカモの嘴あるいは牛の口の形の靴が登場して来た。イギリスの絶対王政を確立したヘンリー 8 世（1491 - 1547）の肖像画では、幅広の靴を履いた姿が描かれている。この形の靴は貴族から傭兵や市民にも浸透した。16世紀前半には農民も踝の上を革紐で結ぶ靴（ブントシュー）をはいた。16世紀には木製高台付のチョピンという革細工や刺繍が施されていた女性用の靴が流行した。これはトルコの浴室の

熱い床を歩くときに用いられたものに由来するといわれている。この靴が靴底に厚みを付け、後のハイヒールとなった。ドイツ靴博物館のカタログに示されているチョピンは1600年頃のヴェネチアのものであり、高台の高さが14cmであり、子供の靴は1610年頃のイタリアのもので、踵があり、底前部にも革が貼り付けてある（図2）³⁾。1680年頃のロートリンゲン（フランス東北部）製と思われるハイヒールと1760年頃の締め金付の靴も示されている。前者は革の踵が7cmで接地部が細くなり、爪先が尖っている。履き口が広く、茶色の甲部と側面に多数の小さな穴で模様ができおり、下地に白い革が用いられている。一方、後者の踵は太く、甲部が絹で装飾されている。17、18世紀の靴の特徴は踵にあり、1600年頃からイタリアで知られ、フランスを通じて全ヨーロッパに普及した。その過程で、踵の高さや形が変化し、靴に留め金やリボンの装飾が施されるようになった。フランスで流行した美しい曲線や輪郭の踵の靴はルイ王朝にちなんでルイ・ヒールと称された。ハイヒールは男女とも履いた。この当時の靴は左右の違いがなく同形であり、足に合わせて異なるようになったのは19世紀後半である。本誌154、155号に市田がヒールの変遷と17、18世紀の靴について述べている。

15世紀後半からイギリスでは騎士の靴として長靴が発達したが、17世紀初め頃からは長靴が流行し、短靴を凌駕した。ロシアの子牛革、コルドバ革、鹿革、バフ革等が用いられた⁴⁾。17世紀初頭のフランスやドイツの軍人はまだ短靴を履いており、半ズボンをはいていたので、革製または毛糸の長靴下をはくか、あるいは革製の臍当て（ゲートル）をしていた⁵⁾。18世紀初め騎兵が革製のゲートルを巻いていたが、中産



図2 17、18世紀の靴
(a、チョピン；b、子供の靴；c、ハイヒール；d、締め金付きの靴)

階級の人々も使用していた。長靴は16世紀末には靴下のような脚に合ったものであり、乗馬用靴は礼装や流行のコスチュームの中にまで入るほどであった。その後17世紀になると、ズボンの長さが膝下まで伸び、長靴がより短く太くなり、靴の上部が漏斗形の履き口の広いものが流行し、またデュマの小説「三銃士」の銃士の靴のように外観を気にして上部に襷を作り、外側に折り曲げていた(図3)⁵⁾。スペインでは、折り曲げず、膝上までのものであった。

3. 手袋

革の手袋はエジプトのツタンカーメンの墳墓からも副葬品として発見されており、大昔から使用されていた。中世の王族や貴族は儀式の時に使用し、権威の象徴とした。イギリスのエリザベス1世(1533-1603)およびジャコブ1世(1566-1625)、メアリー・スチュアート王妃(1542-1587)の優美な手袋は現在も保存されている(図4)⁶⁾。労働者や兵士、鷹匠なども一般的に使用していた。16世紀のフランスにおける手袋製造の中心はニオールであったが、その他にサンジュニアン、ミヨー、グルノーブルなどであった⁷⁾。なおグルノーブルは

19世紀になって、製作機械の発明により一躍発展した。パリでは装飾した手袋の製作が盛んであった。死産した子山羊や子牛の皮を用いた「雛鶏の手袋(Gants de cuir de poule)」と称するものが流行した^{6), 7)}。同様のものをアイルランドのダブリンとリムリックではチキングローブ(Chicken gloves)という名で製造していた。ルイ14世(在位1643-1715)の時代までは、男は一般的にはいろいろな形の革手袋を用いた。宮廷では、装飾が派手になり、婦人用の手袋は当時すでに山羊の白革製であった。この革の鞣しは卵黄と小麦粉が使用され、後のグレイス鞣しに発展した。白い手袋はたいてい絹のリボンや刺繍で飾られた。ルイ15世(在位1715-1774)の時代には、バラ色や深紅色に彩色され、なかには香料を用いた手袋をポンパドウル侯爵夫人が愛用し、流行に貢献した。パリの手袋製作所の数は1692年が102であり、1725年には250となり、1789年のフランス革命まではさらに増加した。しかしその後は激減した⁶⁾。

イギリスでは手袋の製造が盛んであり、装飾用あるいは防具用等いろいろなものがあった。元々ノルマン人やデンマーク人の



図3 17世紀のフランスの服装

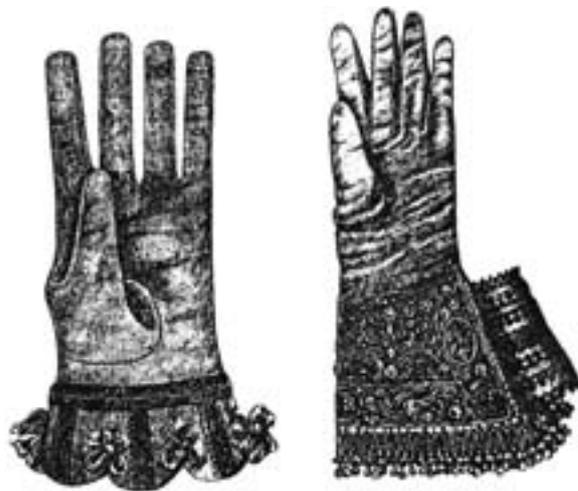


図4 メアリー・スチュアート(1542-1587)の手袋

貴族が用いていた手袋をバイキングが9世紀にイギリスへ最初にもたらした⁶⁾。当時は男性のみが肘にまで届く刺繍したものを着いたが、14世紀になって女性にも流行した。イングランドのウースターでは14世紀より手袋革が専門に製造されていた。手袋の輸入が1826年まで禁止されており、自由化により一時的に衰退した。ロンドンでも古くから手袋製造者の組合が成立しており、1639年の記録によると、「ロンドン市の名誉あるグローブ会社の親方、監督、徒弟、同志」という名称である⁶⁾。スコットランドのパースの手袋は高い評判を得ており、輸出用にも大量に製造していた。1795年には35,000枚の羊革を加工した。しかしその後は衰退した。1760年に手袋製造者がパースからアメリカに渡り、後にアメリカの手袋産業の中心となるグローバズビル（アメリカ北東部）という町の発展に貢献した⁷⁾。

ドイツでは18世紀中頃までは、手袋の使用は少なく、もっぱらセーム革で作られていたが、18世紀末には一般的になり、多くの方は安価な白鞣し革のものを使用した。デンマーク革やグレイス革も徐々に普及した。デンマークでは昔から羊が多く飼われており、コペンハーゲンを中心に古くからデンマーク革とグレイス革が製造されていた。手袋ばかりでなくベストや外套、スカートにも利用されていた。デンマークの手袋はフランスやイギリス、イタリア、ドイツで喜ばれていた。

4. 衣類

中世の頃より革製の陣羽織(レントナー)は金属性の甲冑の羽織に、また胴着(タブレット)は甲冑の下着や小札鎧あるいは帷子鎧こざねに使用されていたが、16世紀初めには甲冑の上部が革製のものも出てきた。17世

紀初期には戦闘が鉄砲による集団戦となり鉄製の甲冑が着用されなくなり、胴着だけに軽装化された⁵⁾。タブレットは一般男子の上着として、15世紀から17世紀に使用された。フランスやドイツの軍人は革製ジャケット(カラーあるいはコレ)を着用し、銃兵は裾が長めのジャケットと弾薬帯(バンデリーア)を左肩からたすき掛けで着用していた⁵⁾。特に士官用には前部下端を三角形に伸ばしたジャケットが使用されていた。

婦人のハンドバッグは男子服のポケットに相当するもので、中世の頃、金銭や小物類を財布や革製の小物入れに入れて、あるいはベルトに結んで持ち歩いた。ルネサンスの頃、革製ハンドバッグのベルトに金属をはめ込んだものや刺繍などの飾りを付けたものが流行した。

王や貴族はマントを着用したが、その裏地や縁取りに毛皮を使用した。貴婦人の表衣のワンピースの裏地や袖口の折り返しにも毛皮が使用されていた。アンリ(ヘンリー)3世の妃ルーズがワンピースに毛皮の白い袖カバーを着けており、ルイ15世の妃レシュチンスカが絹のドレスを纏い、イタチの毛皮で裏打ちした青いビロードのマントを羽織っていた⁵⁾。16世紀中頃のフランス最高法院長は白い毛皮製のカラーを肩覆いとして羽織っていた。高級な毛皮として、クロテン、シロテン、リス、ビーバー、アーミン(オコジョ)等が挙げられる。

革の特異な利用として、マルセユ(フランス)の医者が1720年のペストの伝染病対策にコルドバ革のマントとマスクを着用した⁷⁾。

5. 袋物・容器等

皮袋はハルシュタット(オーストリア)の遺跡(青銅器時代末から鉄器時代初期)

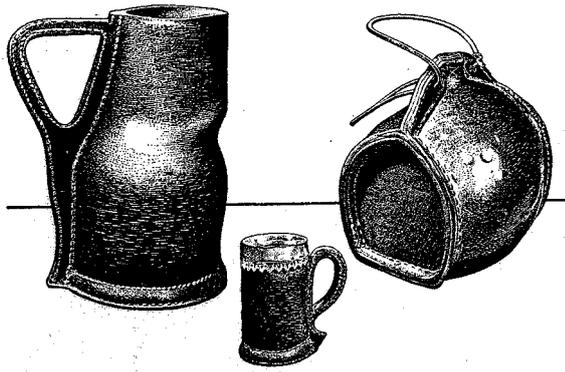


図5 17世紀の革製容器
(左より水差し、酒器、瓶)

から岩塩運搬用として出土しているが、16世紀のシュタイエルマルク(オーストリア)の山岳地では、鉱石の運搬に豚の皮袋を使用していた⁷⁾。皮(革)は古くから水や酒などの容器すなわち皮袋として使用されていたが、中世以降型にはめて成形し内部に樹脂やピッチを塗った革製の水差し(ボムバード)、酒器(ブラックジャック)、瓶(ボトル)が使用され、18世紀には貧富に関りなく日常的に使用された(図5)⁴⁾。

イギリスやアイルランドの河川で紀元前から18世紀頃まで用いられたコラクルと言われる皮舟がある。これは柳の枝で直径1m余の円形あるいは卵形の骨組みを組み牛または馬の皮を被せたものであり、一人で担いで運搬できるほどのものであった⁸⁾。箱型のヤクの皮舟(コア)はチベットでも現在に至るまで使用された。

めずらしい革の利用として、スエーデンのグスタフ2世が1626年に銅製の大型の大砲に皮をかぶせて、軽量化を図った(「皮の大砲」ブルタニカ百科事典)。

6. まとめ

17世紀に踵のある靴が流行し、その形状は時代と共に変化し、装飾が施された。騎士や軍人は長靴を好んだので、長靴が短靴を凌駕し、その形状も美的に変化した。手袋は権威的なものから女性のお洒落用となり、革製胴着は軍人用から一般人の上着となり普及した。水や酒を入れる容器にも防水を施した革が使用された。

文 献

- 1) Diderot, M., D'Alembert, M. : "Encyclopedie ou Dictionnaire Raisonne des Sciences des Arts et des Metiers", 24, Friedrich Frommann Verlag, Stuttgart-Bad Cannstatt (1967).
- 2) ジャック・ブルースト監修・解説 : "フランス百科全書絵引", 11 皮革技術 Peau, 平凡社 (1985) P. 627.
- 3) Deutsches Ledermuseum : "Deutsches Ledermuseum angeschlossen Deutsches Schuhmuseum", Graphische Werkstatt, Offenbach (1956) Nr. 3301, 3310, 3330, 3355.
- 4) Waterer, J. W. : "A History of Technology", The Clarendon press, Oxford (1956) P. 47.
- 5) アドルフ・ローゼンベルク : "図説服装の歴史 上", 図書刊行会 (2001) P. 429.
- 6) Jettmar, J. : "Die Lederhandschuhfabrikation", Verlag von Bernh. Friedr. Volgt, Leipzig (1915) P. 9, 14, 51.
- 7) Bravo, G. A. : "100000 Jahre Leder Eine Monographie", Birkhauser Verlag, Basel und Stuttgart (1970) P. 223.
- 8) 伊藤亜人 : "日本古代文化の探求 船", 社会思想社 (1975) P. 160.